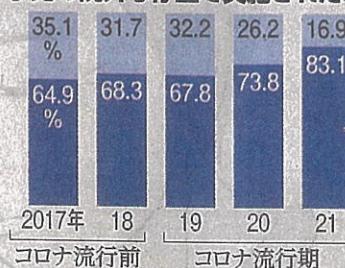


人工呼吸 コロナ禍で大幅減

子どもへの救命行動 岡山大が分析

小児の院外心停止で実施された心肺蘇生法



小原隆史特任講師

一方で人工呼吸は技術的にも心理的にもハーダルが高く、ためらって胸骨圧迫と人工呼吸の組み合わせを行ったケースが多いといふ。このため子どもの心停止では人工呼吸を含めた心肺蘇生法が望ましいとされてきた。

大人の心停止は心筋梗塞など心臓に原因がある場合が多いが、子どもの場合は水に溺れたり物をのどにつまらせたりして息がきくなり、心停止するケースが多いという。このため子どもの心停止では人工呼吸を含めた心肺蘇生法が望ましいとされてきた。

研究グループでは、消防庁が管理する病院外での心停止事例のデータベースを利用し、17～21歳に発生した17歳以下の小児の院外心停止7162例を解析。救急車が到着する前に市民が心肺蘇生を行ったケースは3352例あり、そのうち人工呼吸を含む心肺蘇生が施

感染懼れ控える動き

子どもが水に溺れるなどして心停止したときに強く推奨されている人工呼吸と胸骨圧迫を組み合わせた蘇生法が、新型コロナウイルス感染症が拡大した2020・21年に大きく減少していたことが、岡山大の研究グループの分析で明らかになった。胸骨圧迫のみの蘇生法では死亡リスクが高まり、本来なら救えたはずの命を失っていた可能性もあるとしている。

子どもが水に溺れるなどして心停止したときに強く推奨されている人工呼吸と胸骨圧迫を組み合わせた蘇生法が、新型コロナウイルス感染症が拡大した2020・21年に大きく減少していたことが、岡山大の研究グループの分析で明らかになった。胸骨圧迫のみの蘇生法では死亡リスクが高まり、本来なら救えたはずの命を失っていた可能性もあるとしている。

救えたはずの命も

いる間に胸骨圧迫の中止時間が長くなることから、大人に対しても胸骨圧迫のみの蘇生法が広がってきたという。さ

らに新型コロナの流行を受け、感染リスクを下げるために人工呼吸を控える動きが子どもの救命行動にどのような影響を与えていたか、これまで十分に検証されていなかつた。

受け、感染リスクを下げるために人工呼吸を控える動きが加速。こうした動きが子どもの救命行動にどのよう影響を与えていたか、これまで十分に検証されていなかつた。

らに新型コロナの流行を受け、感染リスクを下げるために人工呼吸の大切さを再認識してほしい。どうすれば、もっと安心して子どもを助けられる社会にできるのか、今回の研究が考えるきっかけになつてほしい」と話している。

研究結果は国際的な学術誌「Resuscitation」に掲載された。
(渡辺翔太郎)

う。

研究を中心になつて進めた岡山大の小原隆史特任講師は「特に、幼稚園や学校の先生、子育てをしている親御さんなど、子どもが身近にいる人に、まずは人工呼吸の大切さを再認識してほしい。どうすれば、もっと安心して子どもを助けられる社会にできるのか、今回の研究が考えるきっかけになつてほしい」と話している。

計的に推定されたとい